

## 1 研究主題

### 「思いや願いを明確にもち、学習対象と繰り返し関わろうとする子どもの育成」

## 2 研究主題について

### (1) 研究総論との関連

研究総論は研究重点を『「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討し、めざす子供の姿を実現するための手立てを追究する』こととし、そのために『意欲』『粘り強さ』に働きかける手立て、そのほか『「ともに学び、学び抜く子供」の実現にむけての手立てを追究する』ことを研究の手立てとしている。生活科のこれまでの研究でも「意欲」「粘り強さ」に注目し、学習指導要領解説生活科編及び「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料をもとに以下のように「意欲」「粘り強さ」を整理し、生活科の学習においても重要な要素であるとして研究を進めてきた。

意欲 …明確な思いや願いを友達と共有し、その実現に向けて進んで学んだり、生活を豊かにしたりしたいという気持ち

粘り強さ…「学習の調整」、「実感や自信」と合わせ「学びに向かう力、人間性等」を評価する際に踏まえる視点

「意欲」は、学びや活動を発動させるものであり、思いや願いと重なる部分が多い。「粘り強さ」は学習対象と繰り返し関わることを支えるものであり、学習対象と繰り返し関わる中で子どもたちの気付きの質が高まっていく。「粘り強さ」について「思いや願いの実現に向かおうとしている」姿は、学習対象によって様々な表れ方をすると考えられる。様々な表れ方から共通点を検討し、「粘り強さ」を「学習対象と繰り返し関わりたいという気持ち」であると捉えた。2年次では1年次で見られた子どもの姿から「意欲」「粘り強さ」を発揮する子どもの姿を検討し、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を再検討する。そして、これらに働きかける手立てを追究していく。

### (2) 本校の生活科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

本校の生活科では、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を以下の通り設定している。

周囲の人と結びつきながらともに学び、生活や学習から得たことを生かして学び抜く子どもの姿

2- (1) で示した通り、「意欲」と「粘り強さ」が発揮されることで、子どもが周囲の人と結びつき学びを広げていくことができたり、授業の枠を飛び越えて学びを続けていくことができたりする。これらが生活科の学びの特徴であり魅力である。このような学びを可能とするのは、具体的な活動を通して学びが行われる、学習対象が子どもにとって親しみ深いものであるという生活科の特質によるものである。生活科の魅力を存分に味わう子どもの姿こそが本校生活科の目指す子どもの姿である。そのためには、子どもが学習対象に主体的に関わって親しみをもつことができるように教師が活動を構築する必要がある。そのような活動を構築する上で重要となってくるのがそれぞれの子どもが幼児期までに積み重ねてきた学びである。例えば、1年生の入学当初、子どもたちが一番よく

手をあげる発問は「保育園、幼稚園の時は、どうしていましたか。」である。1年生の子どもたちは幼稚園、保育所では最上級生であった。そのことを教師から問われれば、子どもたちは意気揚々と語ってくれる。知っていること、見通しがもてることなら安心や親しみを感じ、積極的になれる。こういった見方・考え方を生かすこと、つまり、子どもがすでに有している見方・考え方を生かすことが生活科における身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことであり、子どもが主体的に活動するために重要な点である。1年生の初期だけでなく、2年生も、「1年生の秋祭りでやったお店みたいに時間で区切ったら、いいと思う。」というように生活科の経験を生かして新たな活動に取り組む姿が見られる。2年間を通して見られる学びの在り方である。

このように子どもの身近な生活に関わる見方・考え方を生かすことが「ともに学び、学び抜く子供」の姿を実現するために重要となってくる。

### (3) 2年次研究より

2年次研究では、授業実践を通して、「ともに学び、学び抜く子供」の姿の実現を目指し、以下のような手立てを講じることで周囲の人と結びつきながらともに学ぶ子どもの姿や、生活や学習から得たことを生かして学び抜く子どもの姿を確認することができた。

「周囲の人と結びつきながらともに学ぶ」

- ・学習の自由度を上げることで、必要感をもって他者とつながりながら学習を進めることができる。
- ・タブレット端末を活用することで、周囲の人の気付きや振り返りとつながる。

「生活や学習から得たことを生かして学び抜く」

- ・これまでの生活や学習で経験したことを共有することを通して、それを生かして学習することができる。
- ・子どもの思いや願いに寄り添うことで学び抜くことができる。

2年次の実践を通して、環境構成の方向性を子どもの学習の自由度を高めることにし、思いや願い・気付きをタブレット端末で蓄積しつつ、共有していったことにより一定の成果を得た。

一方、課題として挙げられたことは次の2点である。

- ・単元を通してのゴールイメージの共有や不十分だったこと、共有の機会を逃すことで子どもたちの活動が停滞する場面があった。
- ・共有されたタブレット端末上の思いや願い・気付きの量や頻度に差が出る傾向があった。

授業の中で、単元のゴールのイメージを明確に持つことができている児童は、活動の目的を見失ってしまう姿が見られた。どこを目指して活動しているのかがわからないと、今何をすべきかが明確にならない。また、端末上に現れた思いや願いはあくまで一部分である。活動に夢中になった子どもたちは「友達に伝えたい」という願いより「もっとやりたい」という願いの方が強くなってしまふことがわかった。

## 3 研究内容 「ともに学び、学び抜く子供」を育むための授業について

1・2年次の研究から3年次でも、これまで同様、環境構成と思いや願い・気付きを共有する場の設定を手立てとするが2(3)を踏まえ、本年度は子どもに委ねる授業づくりを目指していく。本来、授業では、教えたこと、学ばせたいことに向かって教師が活動を設定する。確かに教師が設定した活動の方が、効率よくつけたい力をつけることができる。一方、子どもたちは教師の指示で動くことになる。もちろん、教師の工夫次第で子どもたちにやりたいと思わせ、自分たちで決定

した活動かのように見せることもできるが、実際は教師の敷いたレールの上で活動していることが多い。本研究では、本当の意味で子どもたちがやりたいこと、学びたいことに向かっていけるような授業づくりを目指していきたい。教師の教えたいことを大切にしたい授業づくりから、子どもたちの学びたいこと、子どもたちがやりたいことを大切にしたい授業づくりへの転換を行なっていく。

### (1) 子どもに委ねる授業づくりについて

ここでは、より具体的に何をどのように子どもたちに委ねるのかを示す。

#### ① 学習環境の選択を子どもに委ねる

2年次までに設定した環境構成の視点は以下の通りである。

人	…板書・発問・声掛けなど教師の働きかけや個人、グループなど活動の人数の規模
物	…学習対象そのものや活動で使用する物品の質・量
場所	…活動する場所や物の配置など
時間	…活動のタイミング、活動時間と回数

教師はこれらの環境を子どもたちが選択できるように用意する。子どもたちは自分の都合やタイミングで選択できるようにする。必要に応じて自分たちでグループを作り、必要に応じて先生と学び、活動に合わせて必要なもの・場所を選ぶ。授業時間の使い方も子どもたちが自由に設定できるようにする。45分の中で、活動→振り返り→活動→振り返りのサイクルを時間で回すのではなく、子どもたちが自分自身で回すことができるようにする。子どもたちは満足するまで活動し、気づき、思いや願いを友達に伝えたいと思ったタイミングで伝えることができるようになる。

#### ② 学習のゴールを子どもたちに委ねる

単元の流れを教師や時間の都合ではなく、子どもたちの思いや願いに合わせて柔軟に設定していく。昨年度の研究では、ゴールイメージの共有が不十分だったことが課題として挙げられた。単元の流れを教師の思いで設定してしまったことが一因と考えられる。今日の生活科では、次の生活科では、何をするのか、何がしたいのか、子どもたちの思いや願いを受け止めて、柔軟な単元計画を作るようにしたい。また、生活科の授業がひと段落しても、子どもたちの活動続いていくことも想定し、ゴールではなく、単元の一区切りとして、子どもたちとどんな活動をするのか考えていきたい。その際、様々な思いや願いが想定されるが、それらを叶えることができる柔軟な活動を設定したい。例えば、昨年度の「おもちゃハピネスモール」のように「おもちゃでゲームを作る」「おもちゃ屋さんになる」「おもちゃ体験コーナーを作る」「おもちゃ作り教室をやる」など様々な思いや願いが集まった単元の区切りを設定できるようにしたい。

#### ③ ICTの活用を子どもに委ねる

子どもたちがICTを自由に活用することで、学習は広がっていく。まず、ICTを活用することで子どもの表現の幅が広がる。1, 2年生は発達段階的にも気づき、思いや願いの言語化が難しい。写真、動画、イラストを活用することで伝えたいことをありのまま伝えることができるようになる。次に、活動の成果や振り返りをいつでも友達に伝えることができる環境を用意することで、授業時間を飛び出した学習を行う姿が見られる。授業の中で活動し足りない子どもは休み時間や家に帰っても活動を続けていく。今までの生活科でも授業を飛び出した姿が見られたが、端末を活用することで、それらの活動が記録に残り、授業とつながり広がっていくだろう。

上記の①～③をベースに児童の実態、発達段階に合わせて、子どもたちに委ねる授業作りを行っていく。子どもたちに委ねる授業をすることで、子どもたちはたくさんの選択肢の中から自分に合っていること、自分に必要なこと、自分がやりたいことを選択していく。選択しながら学ぶ中で子どもたちは周囲の人と自ら結びつきながら、自分の生活や学習から得たことを活かして学習

に取り組むだろう。また、思いや願いを中心にして学習が展開されるので、常に意欲をもって活動することができる。

## (2) 活動を学びに変える教師の役割

「子どもたちに委ねる」と学びが保障されないのではないかと危惧されるだろう。また、生活科は「何を学ぶのか」が明確ではなく、「活動あって学びなし」と言われる授業が散見される。本研究の「子どもに委ねる授業」もやもすれば同様に学びのない授業に終始してしまう可能性もある。

そこで、子どもたちの自由な活動を学びに変えることが教師の役割であると考え、教師は以下のねらいを持って子どもとの関わりを重ねる。

### ① 教師の指導性を環境に埋め込む

子どもたちに授業を委ねる中で、子どもたちだけではどうしても気付けないことが出てくる。また、活動が単元の題材から離れていってしまう可能性もある。そのため、教師は子どもたちが選択できる環境の中に指導性を埋め込む必要がある。例えば、ワークシートを工夫することで、生活科の見方考え方を発揮できるようにする。年間の単元配列表を作り、他教科共関連付けて子どもたちの学びが広がるようにする。など、子どもたちの活動や環境の中に指導性を埋め込むことで、子どもたちの思いや願いに沿った活動を生活科の学びに変換していく。

### ② 子どもの活動の広がり进行想定する

生活科では子どもたちは教師の想定できないような学びを広げていく。子どもたちの学びが想定を超えて広がっていくことが理想でもある。一方で、子どもたちの学びを可能な限り想定することも大切になる。そこで、時間軸で作られた指導案と共に、子どもたちの活動を広げるリゾーム型の学習案も作成し、子どもたちの学びを限界まで想定する。学びのつながりや発展を教師が限界まで想定することで、子どもたちの思いや願いがより発展するよう支援をすることができる。また、想定した活動が生活科におけるどのような学びに位置付けることができるかを整理しておく。どの活動でどのような思考が働き、どのような気付きを得られるのかを考えておくことで、即時的にフィードバックすることができる。そうすることで、子どもたちは学びを自覚化し、確かなものにすることができる。限界まで想定することで、子どもたちの活動が想定を超えたとしても、想定している活動と照らし合わせながら価値付けることや軌道修正することができる。

上記の①、②を通して、子どもたちに学びを委ねつつ、生活科としての学びを大切にした授業づくりを目指していく。

## 〈引用文献・参考文献〉

- ・独立行政法人教職員支援機構「小学校学習指導要領生活科改定のポイントと指導の改善・充実」2021年
- ・国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料小学校生活科」2020年
- ・小塩真司「非認知能力：概念・測定と教育の可能性」2021年
- ・文部科学省「小学校新学習指導要領（平成29年告示）解説生活編」2018年
- ・田村学「実践・小学校生活科指導法」学文社
- ・安藤浩太「そこに、遊びがある授業」